

令和4年度 成績概要書

課題コード（研究区分）： 4104-426500 （道受託研究）

1. 研究課題名と成果の要約

- 1) 研究成果名：令和4年度の発生にかんがみ注意すべき病害虫
（研究課題名：令和4年度病害虫発生予察調査）
- 2) キーワード：病害虫発生予察、注意すべき病害虫、新発生病害虫
- 3) 成果の要約：令和4年度に実施した病害虫発生予察調査から、多発傾向にあった病害虫として8病害虫を示した。また、令和5年度に特に注意を要する病害虫として4病害虫について防除指導上の注意を喚起する。さらに、令和4年度に新たに発生を認めた病害虫として14病害虫（病害8、害虫6）を示した。

2. 研究機関名

- 1) 代表機関・部・グループ・役職・担当者名：中央農業試験場・病虫害部・予察診断グループ・研究主幹・小松 勉

2) 共同研究機関（協力機関）：

中央農業試験場・病虫害部・病害虫グループ、上川農業試験場・研究部・生産技術グループ、道南農業試験場・研究部・作物害虫グループ、十勝農業試験場・研究部・生産技術グループ、北見農業試験場・研究部・生産技術グループ、花・野菜技術センター・研究部・生産技術グループ、北海道農政部技術普及課、北海道農業研究センター、北海道病害虫防除所、（全道農業改良普及センター）

3. 研究期間：令和4年度（2022年度）

4. 研究概要

1) 研究の背景

病害虫の発生はその年の発生状況や気象経過のほかに、前年の発生状況の影響を受ける。効率的な病害虫防除を実施するためにはそれらを踏まえた全道的な情報が求められる。また、道内で未確認の病害虫が突発的に発生するため、迅速な対応が求められる。

2) 研究の目的

全道での病害虫発生状況を新発生病害虫も含めて記録し、これをもとに次年度に注意すべき病害虫を示して防除指導にあたっての注意を喚起する。

5. 研究内容

1) 農作物有害動植物の発生状況

- ・ねらい：農作物有害動植物の発生状況を記録する
- ・試験項目等：18作物・86病害虫の発生状況を調査

2) 突発および新発生病害虫の診断試験および調査

- ・ねらい：道内で新たに発生した病害虫を同定し記録する
- ・試験項目等：発生調査、再現試験、同定試験

6. 研究成果

1) 令和4年に多発～やや多発した病害虫

- (1) 水稻：紋枯病
- (2) 秋まき小麦：雪腐病
- (3) 春まき小麦：ムギキモグリバエ
- (4) てんさい：褐斑病
- (5) たまねぎ：軟腐病
- (6) ねぎ：さび病
- (7) にんじん：黒葉枯病
- (8) りんご：腐らん病

2) 令和5年度に特に注意を要する病害虫

- (1) 水稻のイネキモグリバエ

令和4年は、胆振、空知及び日高地方の水田においてイネキモグリバエによる被害が広く認められた。

本種による典型的な症状は葉先枯れであるが、遅い時期に加害されると傷穂、出すくみ、及び芯枯を生じる。多発した地域では越冬量が多いと推測されるため、令和5年の発生経過に注意が必要である。多発した地域では本種に対して登録のある箱施用剤を使用する。

(2) てんさいの褐斑病

令和4年は夏季の高温、多雨により本病の発生が多くなった。発生が多かった地域では令和5年も発生に注意する必要がある。耕種的な対策としては、連作を避け、可能な限り抵抗性の強い品種の導入が有効である。薬剤散布は遅くとも初発直後までに薬剤散布を開始する。多数の薬剤で耐性菌の発生が確認されているため、マンゼブ剤を基幹とした防除を実施する。

(3) トマトの青枯病及びかいよう病

令和4年は7月が高温となったこと、8月が多雨となったことから青枯病およびかいよう病が各地で散発した。いずれの病害とも発生圃場にトマトを栽培すると再び発病することから対策が必要である。

青枯病は、深耕還元消毒と抵抗性台木の組み合わせが有効である。また、発生を拡大させないために発症株はすみやかに抜き取るのが重要である。

かいよう病は発生に気がつかないまま芽かき作業などで周囲に広がる場合が多い。発生株はすみやかに抜き取り、刃を殺菌できる鋏等を使用し感染を広げないことも重要である。太陽熱消毒や土壌燻蒸剤による土壌消毒が有効である。また、本病は種子伝染もするので、健全な種子を用いることも重要である。

(4) ウリ科野菜の土壌病害

近年ウリ科野菜のホモプシス根腐病及びメロン黒点根腐病の発生地域が拡大する傾向にある。両病害ともに発生に気が付かずに被害が拡大している可能性があるため、毛細根を観察して、ホモプシス根腐病による黒色構造（偽子座、偽微小菌核）または黒点根腐病による子のう殻の有無を確認する必要がある。発生ほ場における対策として、両病害ともに薬剤による土壌消毒が有効である。

3) 新たに発生を認めた病害虫

(1) 菜豆のホソヘリカメムシ（新寄主）

(2) そばのタデノクチブトサルゾウムシ（新寄主）

(3) せんきゅうのジャガイモヒゲナガアブラムシ、ニンジンフタオアブラムシ（新寄主）

(4) にんじんの斑紋萎縮病（新称）

(5) にんじんのニンジンオマルアブラムシ（新寄主）

(6) ごぼうの黒あざ病（病原の追加）

(7) ながいもの青かび病（病原菌の同定、病原の追加）

(8) ブロッコリーの苗立枯病（病原の追加）

(9) ブロッコリーの黒すす病（病原の追加）

(10) アスパラガスのヤケヤステ（新寄主）

(11) トルコギキョウの斑点病（新発生）

(12) ぶどうの晩腐病（病原の追加）

(13) たらきの半身萎凋病（新発生）

○新称：これまで正式な名称（病名、害虫の和名）のなかった新たな病害虫の名称提案。

○国内新発生：これまで国内での発生事例がなかった病害虫

○新発生：道内での発生事例がなかった病害、道内に分布が確認されていなかった害虫

○新寄主：道内に分布することが既知である害虫の、新たな作物への加害記録

○新症状：既知病原菌・病害における新たな症状

○病原菌の同定：未同定だった病原菌の種名の確定

○病原の追加：既知病害と病徴に違いのない新たな病原の追加

7. 成果の活用策

1) 成果の活用面と留意点

ここに記載した病害虫について、特に今後の発生動向に注意する。また、令和5年度に特に注意を要する病害虫については適切な防除対策を講じる。

2) 残された問題とその対応

8. 研究成果の発表等

なし